

往觀偈講話

梅原真隆述

特 2

356

真學苑

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始

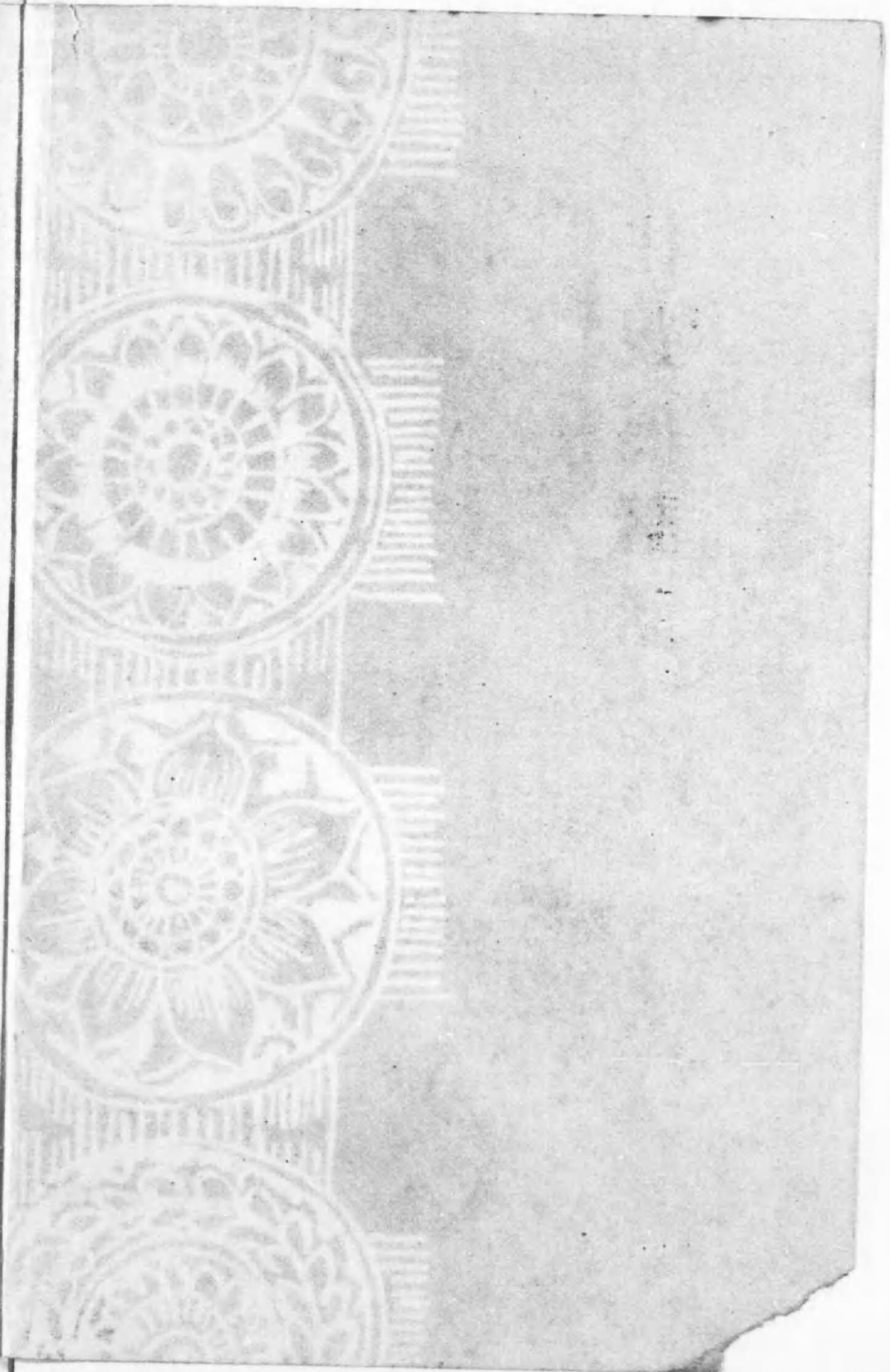


特216
356



往觀傳講話

梅原真隆述





目次

一 序 説……………一

諸佛の稱讚と菩薩の往詣―顯示大道の具現―親鸞聖人の讃頌

二 菩薩の往觀……………一三

無量覺と救ひの力―菩薩の往觀の意味―芳躅を慕うて

三 供養と願求……………二二

菩薩の行事―供養の功德―思慕の願念

四 瑞現と授記……………二九

瑞相を現したまふ―授記と説法

五 諸佛の稱讚……………四〇

往き易き道—往生と成佛—信心の智慧—聖なる立場—最高の聖化

六 難信の大道……………五二

宿善の開發—謙敬の領納—藥聽の宿縁—佛智の深廣—難思の佛智—
極難信の法

七 勸信と激勵……………六三

知遇の鴻恩—大千の火を過ぎて

後の言葉……………六八

(一) 序 説

諸佛の稱讚と菩薩の往詣

淨土眞宗において眞實の教として、崇重する大無量壽經には三つの偈頌が説示されてあります、すなはち、歎佛偈と重誓偈と往觀偈であります。さきに、大原君が歎佛偈を講じ高千穂君が重誓偈を講ぜられまして、その講讚と共にこの學苑の叢書として刊行されてあります。仍つて、私はこの夏の夏の朝の講座に往觀偈を讃嘆することに致しました。

經典は一字一句、ことごとく満足大悲の實語であります。始めから終りまで、われらの生命の糧として、ありがたく信受すべきことは、いふまでもあ

りませぬ。とりわけて偈頌といふものはその説法が高調に達したとき、自然と流露されたものであります。故に、經典をいたゞくに際して、偈頌は殊に感佩すべきであります。

さて、この往觀偈は何をおしめしになつたものであらうか、これについてはまづ大無量壽經に於ける往觀偈の地位を注意すべきであります。

大無量壽經は上巻と下巻にわかれてをりまして、上巻には如來の成佛なされた因果をお説きなされてあり、下巻には衆生の往生する因果をお説きなされてあります。そのうち、衆生の往生する因法をお説きなするうちに、念佛往生と諸行往生とを開説せられ、これを結ぶに、諸佛の稱讚と菩薩の往詣とをのべられました。いまこの往觀偈は、まさしく菩薩の往詣と諸佛の稱讚とを示して無量壽佛の尊高をほめた、へられた偈頌であります。

往觀偈のまへ、即ち、偈前の經文をいたゞくと、この旨趣が明白に窺はれます。即ち偈前の經文は二段になつてあります。

まづ第一段には「佛、阿難に告げたまはく、無量壽佛の威神極なし、十方世界の無量無邊不可思議の諸佛如來稱嘆せざるは莫し」と説いてあります。無量壽佛即ち阿彌陀佛のすぐれた功德、ふしぎな威力は、きわまりがない。そこで十方の世界にまします數知れぬ佛たちは、のこらず阿彌陀佛の御徳をほめた、へなされると、釋迦牟尼佛は阿難に仰せられたといふ意味であります。つまり、この一段は諸佛が阿彌陀佛の威神力を稱讚なさる光景を説かれたものであります。

次に、第二段には「彼の東方恒沙の佛國に於て無量無數の菩薩衆、皆悉く無量の所に往詣し、恭敬供養し、諸の菩薩聲聞大衆に及ぼさん、經法を

四
聽受し、道化を宣布す、南西北方、四維上下も亦復是の如し」と説いてあります。東の方にある數多き佛國がある、さながら恒河の沙の數ほどたくさんな佛國がある、その佛國には道を修する數知れぬ菩薩たちがゐらせられるが、みな、のこらず無量壽佛のお膝元、即ち阿彌陀佛の安養淨土に往詣して、阿彌陀佛はまうすまでもなく、その眷屬であらせられる菩薩方や聲聞の大衆までを、恭敬して供養しなされる。なほ自ら親しく阿彌陀佛の説法を聽聞し信受すると同時に一切の衆生にそれを説き聞かせて化益したまふといふ意味であります。これを要するに、菩薩が阿彌陀佛の淨土へ往詣なされることを讚嘆せられたのであります。

かやうに偈前の經文には、「諸佛の稱讚」と「菩薩の往詣」とを説かれてあります。これを委しくさらに力強く偈頌としてたゞへられたのがこの往觀

偈であります。

それでは、この「諸佛の稱讚」と「菩薩の往詣」をたゞへることが、如何にして阿彌陀佛とその淨土を讚へることが念佛の大道を稱揚することになりませうか、これはしづかに味ふべきことであります。

顯示大道の具現

凡そ、道を體得するにはその價値を認識すること、その價値を履踐することが大切であります。龍樹菩薩は智度論のなかに、「智目行足、清涼地に到る」と仰せられてあるのはこの意味に外なりません、清涼地といふは涅槃の境地でありまして、その境地に到るには智慧の目と修行の足とが大切であるといふのであります。この「智目」といふは「認識」であり、その「行足」

といふは「履踐」であります。

六

いまこの「諸佛の稱讚」といふことは完全な智目による認識であり、「菩薩の往詣」といふことは最高の行足による履踐であります。最も完全な諸佛によつて稱讚せらるゝことによつて、阿彌陀佛の尊高があきらかに證明され、最も真剣な菩薩が往詣するといふことによつて、阿彌陀佛の淨土の高妙なことが力強く闡明せられる次第であります。

言葉を換ていへば、最もめざました諸佛の稱讚せられる佛は阿彌陀佛であるといふ事實によつて、いよゝ阿彌陀佛のありがたさが仰がれる次第であります。また、最も高級な菩薩の往詣せられる佛土は安樂淨土であるといふ事實によつていよゝ安樂淨土の尊さが窺はれるのであります。これによつて、「諸佛の稱讚」と「菩薩の往詣」といふふたつの事實をお説きになつて、

阿彌陀佛とその國土のありがたさと尊さを、具體的に顯示なされた次第であります。

そして、阿彌陀佛とその國土の尊いことをお示しになつたのは、われら衆生に向つて念佛往生の大道を信受するやうにお勧めなされたのであります。即ち、かゝる尊い阿彌陀佛を念じて、すぐれた淨土へ往生することは、最高の大道を行く所以であること眞實の救ひであることをさとされた次第であります。

われらは、尊いものを認識する智目もなく、すぐれた理想を慕うて行く能力もない凡夫であります。そこで、われらはこの諸佛の稱讚と菩薩の往觀をきゝひらいて佛達の認めたまふ如く認め、菩薩の慕ひたまふごとく慕ふべきことをさとされた次第でありまして、まことに行届いた釋尊のお心づくしで

七

あります。

親鸞聖人の讃頌

かの曇鸞和尚も、わが親鸞聖人も、この風光を、ふかく感動なされまし
た。即ち曇鸞和尚の讃阿彌陀佛偈には、次のごとく讃嘆せられました。

神力無極阿彌陀

十方無量佛所歎

東方恒沙諸佛國

菩薩無數悉往觀

亦復供養安養國

菩薩聲聞諸大衆

聽ニ受經法一宣ニ道化一
自餘九方亦如レ是
釋迦如來說レ偈頌ニ
無量功德一故頂禮
諸來無量菩薩衆
爲レ植ニ德本一致ニ虔恭一
或奏ニ音樂一歌ニ歎佛一（中略）
故我頂ニ禮婆伽婆一
また親鸞聖人はこれをうけて、次のとほりに和讃せられました。
神力無極の阿彌陀は
無量の諸佛ほめたまふ

東方恒沙の佛國より

無數の菩薩ゆきたまふ

自餘の九方の佛國も

菩薩の往觀みなおなじ

釋迦牟尼如來偈をときて

無量の功德ほめたまふ

十方無量の菩薩衆

徳本うへんためにとて

恭敬をいたし歌嘆す

ひとみな婆伽婆を歸命せよ

この大意は次のとおりであります。

十方の世界にまします數かぎりない諸佛が、それ／＼自國の菩薩方に對して安養淨土の阿彌陀佛は、その威神のすぐれた功德のたかい不可思議な佛であるから、悉くかの佛國におまゐりて佛を恭敬し、功德をつむやうに勧めめなされる、これがために東方世界の佛國を初めとして、その他の九方の佛國からもたくさんの菩薩が安養淨土へおまゐりなすつて佛を仰ぎ大衆を供養して、經法をとき、またこれを宣説なされるのであります。

さて、かやうに安養淨土へおまゐりなされる十方無量の菩薩方は、その功德をつまるとにあたつて、一心一向につししみ、うやまひ、その功德を讃頌し音聲に出して歌嘆なされる、かやうな尊い功德をそなへたまふ阿彌陀佛であるから婆伽婆すなはち世尊と申し上げるのである。私たちが亦よろしく十方世界の菩薩方にならうて、この世尊をたへまつらねばならぬといふ意味であ

ります。

さうして「釋迦牟尼如來偈をときて」と述べられたのは、この無量壽經の往觀偈のことを指示せられたのであります。

これによつても、この往觀偈は諸佛の稱讚と菩薩の往詣をといひ、われら衆生に眞實の大道を顯示し、これに歸入することをおすゝめなされた意味ぶかい偈頌であることを感戴いたさねばなりません。

(二) 菩薩の往觀

東方諸佛國	東方の諸佛の國
其數如恒沙	その數恒沙のごとし
彼土菩薩衆	彼の土の菩薩衆
往觀無量覺	往て無量覺を觀たてまつる
南西北四維	南・西・北と四維と
上下亦復然	上下もまたまた然り
彼土菩薩衆	彼の土の菩薩衆
往觀無量覺	往て無量覺を觀たてまつる

無量覺と救ひの力

これは十方佛國の菩薩が阿彌陀佛の安養淨土へ往詣して、阿彌陀佛にまみへたまふことをたへへられたのであります。

「無量覺」といふは「阿彌陀佛」の梵音を翻譯したことばでありまして、この偈ではまた「無量尊」とも翻譯してあります。無量の光明と無量の壽命を圓かに具備したまふ覺者といふ意味であります。

さて、無量覺とたへへ無量尊とたへへる阿彌陀佛が、無量の光明と無量の壽命とを圓具したまふことは、どんなことを意味するのでありませうか。これにはいろいろの角度から讚嘆することができるところであります。端的に云へば一切の迷へるものを救ひたまふ威徳をあらはしたまふ、即ち、「迷」

を轉ずる力を示したまふのであります。「迷」といふことは、十二因縁によつて解説すると、その原因においては「無明」であり、その結果において「死滅」である。「無明」と「死滅」こそ「迷」のすがたであります。そして、この「無明」を照破するものは「光明」であり、「死滅」を克服するものは「壽命」であります。そこで阿彌陀佛は「光明」と「壽命」とを圓具したまふことは、一切の迷を轉ずる威力を示したまふ所以であります。故に、われらは阿彌陀佛を瞻仰して「われを救ひたまふ佛」として歸依すべきであります。

菩薩の往觀の意味

次に「往觀」といふは「往」とは往詣のこと、こゝでは安養淨土へおまゐ

りなされることである、「観」といふは観見といふこと、こゝでは阿彌陀佛におめどほりなされることである。すなはち、こゝに示された菩薩の往観といふことは、十方のもろゝの佛國の菩薩方が阿彌陀佛の安養淨土へ詣で、阿彌陀佛を見たてたまふのであります。

尙ほ、親鸞聖人は淨土和讃にこの「往観」に左訓して「わうじやうし、ほとけをみたてまつる」と申されてあります。この御左訓によると往観を一般的の意味よりも深めて、往生といふことに味はれたのであります。往観といふこと、往生といふことは、その文字のあらはすところにおいて義趣が異なるのであります、これを聖人が往生といふことに深めて味はれたことは注意すべき點であります。

一般的な意味即ち諸佛淨土の通規からいへば、往観といふことは菩薩のす

ぐれた能力のひとつであります。即ち、菩薩の位次に五十二階あるうち、その第四十一位たる歡喜地以上の菩薩即ち修行をつんだ高級は菩薩になると、各自の神通力によつて自由に諸佛の淨土に往詣して佛を供養し法を聽聞することができるのであります。

ところが、若しこの往観といふことを彌陀の淨土にとりきつていへば、往生のこゝろとなるのであります。「願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなながら如來の弘誓に乗ずなり」と仰せられたとほり、阿彌陀佛の本願力に成就せられた安養淨土へは、たとへ歡喜地以上の菩薩方でも、自己の神通力といふもの即ち自力の心行では往けないのである。どんなすぐれた菩薩方でも必ず阿彌陀佛の本願他力に乗托せねばなりませぬ。他力の願力に救はれるのであれば、往生と申すべきであります。こゝに聖人は

「往觀」に左訓して「往生」と味はれたのは、自力の神通によることなく、他力の本願によることをあらはれたのであります。

そして、この往生といふ御左訓を施された聖人の見方には根據があるのであります。この往觀偈のうちに、佛徳をたへて「その佛の本願力、名を聞いて往生せんと欲はゞ、皆悉く彼國に到り、自ら不退轉を致さん」と述べられてあります。自力の神通で往詣するのではなくて、本願の名號を聞信して往生する特別の風格を示してあります。

かうしてみると、安養淨土は高次の報土であり、阿彌陀佛は諸佛の統格であらせられることが、明らかに窺はれます。

芳躅を慕うて

尙ほ、「四維」とは四隅のことで、東西南北の四方に四維を加へて八方、それに上下を加へて十方といふことになり、故に十方とは法界の全體を意味するものであります。また「恒沙」とは恒河の沙のことで、無數を意味するのであります。

かやうに十方に數知れぬほどある佛の國々の菩薩たちが、極く往生なさる阿彌陀佛の淨土はまことに法界の畢竟依であることを信知しなくてはなりません。法界のあらゆる菩薩の足跡はことごとく安樂淨土へ向うてゐます。われらもまたこの芳躅を慕うて往生すべきであります。

淨土は眞善美で莊嚴されてあるといふことを、若し「靜的素描」とするならば、こゝに示されたやうに十方の菩薩が往觀なるといふことは「動的素描」とも云ふべきであります。靜的にたゞへ動的にたゞへて、いよゝ安

二〇
樂淨土の尊高至妙なることが窺はれます。これによつて一切群生の胸のうち
に眞實を思慕する光とよろこびがいよゝゝ力強く與へられたのであります。

(三) 供養と願求

一切諸菩薩	一切のもろゝの菩薩
各齋天妙華	おのゝ天の妙華、寶香、
寶香無價衣	無價衣を齋して
供養無量覺	無量覺を供養したてまつる
咸然奏天樂	咸然として天樂を奏し
暢發和雅音	和雅の音を暢發し
歌歎最勝尊	最勝尊を歌歎し
供養無量覺	無量覺を供養したてまつる。

究達神通慧	神通と慧を究達し
遊入深法門	深法門に遊入し
具足功德藏	功德藏を具足し
妙智無等倫	妙智等倫なし
慧日照世間	慧日世間を照し
消除生死雲	生死の雲を消除す
恭敬繞三市	恭敬し繞ること三市して
稽首無上尊	無上尊を稽首したてまつる
見彼嚴淨土	かの嚴淨の土の微妙
微妙難思議	難思議なるを見て
因發無上心	因りて無上心を發し

願我國亦然

我國も亦然らんと願す

菩薩の行事

さきに、菩薩の往觀をのべられましたので、これから、その菩薩の行事を描き出されるのであります。そして、この一段は、恭敬の供養をのべて菩薩の思慕をのべられたのであります。

先づ、この一節の大意を述べると、次のとおりであります。

淨土に往生せるすべての菩薩たちは、めい／＼清淨なすぐれた華、匂ひこぼるゝ香、價のわからないほどの貴い衣を、もつてきて、阿彌陀佛を供養したてまつり、みなうち揃うてすぐれた音楽をかなで、なごやかなそしてみやびやかな音色をのんびりとおこして、すぐれた佛徳を歌うてたゝ

へ、阿彌陀佛を供養したてまつる。

阿彌陀佛の神通と智慧はどこ／＼まで行届いてゐらせられる。深法門すなはち深甚の法門たる實相の法界に遊び、眞理をさとりたまふ。のこらず一切の福德をそなへたまうて、その妙智はひとしきともがらがない。かうして自利の徳をそなへたまふと共に、利他の徳をあらはして、日輪のやうな智慧は世間を照して、生死の雲をとりのけたまふことを讃嘆し、また、菩薩たちは恭敬をもつて佛のぐるりを三廻りして無上尊たる阿彌陀佛にぬかづくのである。かの莊嚴清淨の佛士の微妙なる思議することのできないすぐれたありさまをみるにつけて、菩薩たちは無上菩提心をおこし、わが國土も安養土のやうな妙土たらしめんと願はせられる。

供養の功德

菩薩の行事として、こゝにまづ供養をあげられたことは注意すべきことである。佛は最勝の福田でゐらせられます、この佛を供養したてまつるとは最も價值ある生活を充實することになつたのであります。一莖の華も、一柱の香も、一領の衣も、佛の手にうけられて不朽の生命を賦與せられます、そして、それをさしげる菩薩たちには無量の功德が授與せらるゝのであります。佛を供養することは、そのまゝわれらが最も尊く活かさるゝみちであります。

また、すぐれた天樂を奏で、最勝の佛徳を讃嘆したてまつることもまた尊い供養であります。この讃嘆によつてたゞへられる佛徳が法界に讃仰せら

るゝと共にたゝへるところの菩薩がおのづから聖徳を認識し思慕することによつて、その生活がたかめられるのであります。

おもふに供養と廻施とは法界の正しい生き方でありませぬ。搾取と奪略を生活の方策として惱んでゐるわれらはこゝに深い省察を試みなくてはなりません。

思慕の願念

さらにすすんで讃嘆と恭敬とをあげ、さらに安養土を學ばんとすることをのべられたのである。

實に阿彌陀佛は無上尊であらせられます、自利の徳と利他の徳とを圓かに具備されてあります。まづ自利の徳は神通の用と智慧の體とを具して眞理を

さとり、福徳莊嚴と智慧莊嚴とをそなへたまふのであります。これをたゝへて「神通と智慧を究達し、深法門に遊入し、功德藏を具足し、妙智等倫なし」と仰せられたのであります。

次に「慧日世間を照し、生死の雲を消除す」とは利他の徳を讃へられたものであります。生死の根本は無明でありますから、この無明の黒闇を照破するためには智慧の光明を放たせたまふのであります。

阿彌陀佛はかうした無上尊であるが故にすべての菩薩が恭敬し尊重せず居れないのであります。

佛徳を讃嘆し、佛を恭敬することは聖なる價値に生きる菩薩の自然なすがたであります。法界に逍遙するものゝ法喜であります。そして阿彌陀佛のすぐれた聖徳を讃仰せられた菩薩たちは阿彌陀佛の如き佛となり安養土の如き

淨土を建てんことを願求せらるゝやうになることを示されたのであります。
 これを窺うても阿彌陀佛は法界の統格の佛であらせられ安養淨土は十方に
 超えすぐれた典型であることが知らるゝのであります。

(四) 瑞現と授記

應時無量尊	時に應じて無量尊
動容發欣笑	容を動かし欣笑を發し
口出無數光	口より無數の光を出して
徧照十方國	徧く十方國を照す
廻光圍繞身	光を廻らし身を圍繞し
三市從頂入	三市して頂より入る
一切天人衆	一切の天人衆
踊躍皆歡喜	踊躍して皆歡喜す。

大士觀世音
整服稽首問
白佛何緣笑
唯然願說意
梵聲猶雷震
八音暢妙響
當授菩薩記
今說仁諦聽
十方來正士
吾悉知彼願
志求嚴淨土

大士觀世音
服を整へ稽首して問ひ
佛に白さく何に緣りて笑たまへる
唯然り願くば意を説きたまへ
梵聲猶し雷震のごとく
八音妙響を暢ぶ
當に菩薩に記を授くべし
今説かん仁諦かに聽け
十方より來れる正士
吾悉く彼の願を知れり
嚴淨の土を志求し

受決當作佛
覺了一切法
猶如夢幻響
滿足諸妙願
必成如是刹
知法如雷影
究竟菩薩道
具諸功德本
受決當作佛
通達諸法性
一切空無我

受決して當に作佛すべし
一切の法は猶し夢と幻と
響の如しと覺了すれども
諸の妙願を満足して
必ず是の如きの刹を成ぜん
法は雷と影の如しと知れども
菩薩の道を究竟し
諸の功德の本を具し
受決して當に作佛すべし
諸法の性は一切、空
無我なりと通達すれども

専求淨佛土 専ら淨佛土を求めて
必成如是刹 必ず是の如きの刹を成ぜん

瑞相を現したまふ

この一段は阿彌陀佛が菩薩たちの心願を見とけなされて記別を授けたまふことを説かれたのであります。そして、菩薩に記別を授けなされるにあたりて、瑞相を現じなされました。その瑞相を描いて「時に應じて、無量尊、容を動かし、欣笑を發し、口より無數の光を出して徧く十方國を照す、光を廻らし身を圍繞し三市して頂より入る」とのべてあります。阿彌陀佛を恭敬してさきへのべたやうに菩薩たち我國も亦然らんと願したまふとき、そのとき阿彌陀佛は容を動かしてにつこり欣びの笑をもらしたまひ、御口から無數

の光明を放つて十方の國土の隅々までをお照らしあらせられました。さらに不思議なことには、その光明はもとへ廻つて佛身をぐる／＼と圍繞すること三市、最後に、その光明は佛の頂から佛身のなかへながれ入るのであります。かゝる瑞相を仰ぐや、淨土の大衆たる一切の天人衆はおどりあがつてよろこぶのであります。

そのとき、阿彌陀佛の脇侍の觀世音菩薩は威儀を正し、恭しく阿彌陀佛におたづねなされました。「大士觀世音、服を整へ稽首して問ひ、佛に白さく、何に緣りて笑みたまへる、唯然り、願はくば意を説きたまへ」と。すなはち、如何なる因緣によつて笑をもらしたまふぞ、定めし深い因緣のあらせらるゝことゝはいたゞけますが、願はくばその思召をお説き示しくださいと伺はれたのであります。

すると、阿彌陀佛は嚴かに思召を開顯なさいました。その説法の御聲の嚴かなことを「梵聲猶し雷震のごとく、八音妙響を暢ぶ」と、説いてあります。

この「梵聲」とは清らかな御聲のこと、これは卅二相のひとつであります。すなはち卅二相の第廿八が梵聲相であります。その梵聲がこゝろの底から流れて出ることを雷震のやうであると仰せられたのであります。

また「八音」とは如來の音聲の微妙なることをのべたので、極好音、柔輭音、和適音、尊惠音、不女音、不誤音、深遠音、不竭音をいふのであります。智顛の法界次第には、この八音を釋して、次の如くのべられてあります。

- 一、極好音とは、清雅にして能く聞者をして厭足することなく、皆好道に入らしむるものにして好中の最好なり。

- 二、柔輭音とは、大慈悲心より出づる音聲、巧に物情に順じ、聞者をして喜悅して自然に律行に入らしむ。

- 三、和適音とは、佛は中道の理に據りて行解從容なるが故に、調和中適にして聞者の心を和融し、聲に因りて理を會得せしむ。

- 四、尊惠音とは、佛徳尊高にして、慧心明徹なるが故に、所出の音聲、よく聞者をして尊重し、慧解開明せしむ。

- 五、不女音とは、佛は首楞嚴定に住して常に世雄の徳あるが故に、所出の音聲、よく一切の聞者をして敬畏せしめ、天魔外道歸伏せざるることなし。

- 六、不誤音とは、佛智圓明なるが故に、音聲を以て詮論するに失なく、聞者をして正見を獲て九十五種の邪非を離れしむ。

- 七、深遠音とは、佛智、如々實際の底を窮むるが故に、其音聲は臍より起

りて、十方に徹至し、皆甚深の理を悟りて梵行高遠ならしむ。
八、不竭音とは、如來は無盡の法藏に住するが故に、音聲は滔々として盡くることなく、聞者をして無盡常住の果を成ぜしむ。

授記と説法

阿彌陀佛はこの微妙な八音の響を出して「當に菩薩に記を授くべし、今説かん仁諦かに聽け」と授記の思召をのべて注意を喚起なさいました。
さて、この記を授くるといふ記とは佛が修行者の當來の證果をそれ／＼分別して豫言し保證なさることであります。そして次にある決とは分決の義で何時佛になるといふことを決定せらるゝこと、定めたまふ佛からいへば授記であり、定められる菩薩からは受決であります。

乃ち記を授けてのたまはく「十方より來れる正士吾悉く彼の願を知れり、嚴淨の土を志求し決を受けて當に作佛すべし」と、十方の佛國より來れる菩薩の願を知しめし、その志求する莊嚴清淨の佛土を建立して、やがて佛と作ることができると授記して諄々と説法なされました。

まづ「一切の法は猶し夢と幻と響の如しと覺了すれども、諸の妙願を満足して必ず是の如きの刹を成ぜん」といふは一切の法は他の因縁によりておこせる假有のものであつて、菩薩は一切法はさながら夢の如く幻の如く響の如く實體のないことをさとつてゐながらも、しかも穢土の外に淨土を建てんと、淨佛國土の妙願を發して満足し、必ずわが淨土の如き淨土を成就するであらうといふ意味であります、これは俗諦を説いて成佛國土の記別を授けたまふのであります。

次に「法は電と影の如しと知れども菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具し決を受けて當に作佛すべし」といふは、一切の法は電の如く影の如く實體のないものであるから修すべき行もなく、求むべき果もないと知れども、しかも菩薩の道即ち六度萬行を修し、佛果にいたる因本たる功德を具足するものは、やがて作佛するであらうといふ意味であります。これは行空を説いて成佛の記を授けたまふのであります。

終に「諸法の性は一切空無我なりと通達すれども、専ら淨佛土を求め、必ず是の如きの刹を成ぜん」といふは、一切諸法の實性は眞如である、眞如は常住であつて、空である、無我である、そこで菩薩は一切諸法の實性は空なり無我なりと體達すれども、しかも、淨佛國土の願を發して専ら淨土を求めたならば、必ずわが淨土の如き淨土を成就するであらうと、性空即ち眞諦を

説いて成就國土の記別を授けたまふのであります。

(五) 諸佛の稱讚

諸佛告菩薩
令觀安養佛
聞法樂受行
疾得清淨處
至彼嚴淨國
便速得神通
必於無量尊
受記成等覺

諸佛は菩薩に告げて
安養の佛を觀しめたまふ
法を聞いて樂しんで受行すれば
疾く清淨處を得む
かの嚴淨の國に至りなば
便ち速かに神通を得
必ず無量尊において
記を受けて等覺を成ぜん

其佛本願力
聞名欲往生
皆悉到彼國
自致不退轉
菩薩興至願
願己國無異
普念度一切
名顯達十方
奉事億如來
飛化徧諸刹
恭敬歡喜去

その佛の本願力
名を聞きて往生を欲へば
皆悉く彼國に到りて
自ら不退轉に致らむ
菩薩至願を興して
己が國も異なることなからんと願ひ
普く一切を度せんと念はむ
名あきらかに十方に達せん
億の如來に奉事し
飛化して諸刹に徧く
恭敬して歡喜して去いて

往き易き道

これから以下は諸佛が阿彌陀佛とその淨土をほめたへて、各自の國の菩薩即ち修道の人に阿彌陀佛の淨土へ往生するやうにおすしめなさる一段であります。

かうして、あらゆる諸佛がほめたへたまふといふ事實が阿彌陀佛の淨土が法界における最高の實在であることを顯はすことになるわけであります。さて稱讚するといふことは、その價値を認識するからであります。そこで、諸佛は阿彌陀佛の淨土をほめたへるのに、その利益を數へあげられました。短い偈文でありますから、數おほくの利益を五種につめてたへられてあ

ります。

まづ「諸佛は菩薩に告げて、安養の佛を觀せしめたまふ。法を聞いて楽しんで受行すれば、疾く清淨處を得む。」と、たへられたのであります。十方の世界にまします諸佛たちは、各々その國にある修道の人たる菩薩に、安養界の阿彌陀佛をおがませて、そのお淨土に往生するやうにおすしめなさる、そしてまづ、往きやすい淨土であることをといて南無阿彌陀佛の名號法をきいて信受し、ほれんと稱名すれば、たちまち清淨の處即ちお淨土へまゐらせていたゞけると仰せられました。

どんなにすぐれた淨土でありましても、往生するに、いろ／＼のむづかしい手続きや條件を要するやうでは困ります。手折ることのできぬ高嶺の花のやうな物足りなさがあります。ところが、阿彌陀佛のお淨土は、たゞ名號を

信行するだけで、すぐさま往生されるやうにできあがつてあることがありがたいのであります。

往生と成佛

次に「かの嚴淨の國に至りなば、便ち速かに神通を得、必ず無量尊において、記を受けて等覺を成ぜん。」とたゞへられました。

かの阿彌陀佛のうるはしく、莊嚴された淨き國土にまゐると、そこで速かに神通力を得て、無量尊即ち阿彌陀佛から記別をうけて、等覺即ち佛のさとりを成就させていたゞくといふ讚嘆であります。

これは西方の淨土に往生するとそのまゝ成佛するといふことを讚嘆なされたのであります。もと一般の場合では、淨土に往生することは過程であつ

て、佛果を成就することが究竟である。そこで、往生はいまだ完全な救ひでないと思へられてゐたのであります。ところが阿彌陀佛の淨土はかゝる類のものでなくて、その淨土に往生することが、そのまゝ成就するといふ究竟の救ひを成就することをほめたゞへられたものであります。

信心の智慧

次に「その佛の本願力、名を聞きて往生を欲へば、皆悉く彼國に到りて、自ら不退轉に致らむ。」とたゞへられました。

これは信ずるひとつで往生されることをのべられたのであります。この一句は、わが聖人は教行信證にも引用なされ、尊號眞像銘文にも註釋あらせられました。それほど、大切になされた次第であります。いま銘文の御釋を抄

録すると、次のとおりであります。

「其佛本願力」といふは、彌陀の本願力とまふすなり。「聞名欲往生」といふは、「聞」といふは如來のちかひの御名を信ずとまふすなり。「欲往生」といふは安樂淨刹にむまれむとおもへとなり。「皆悉到彼國」といふは、御ちかひの御名を信じて、むまれむとおもふ人は、みなもれず、かの淨土にいたるとまふす御ことなり。「自致不退轉」といふは「自」は「おのづから」といふ。おのづからといふは、衆生のはからひにあらず、しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり、自然といふことばなり。「致」といふは「いたる」といふ、「むねとす」といふ、如來の本願の御名を信ずることば、自然に不退のくらゐにいたらしむるを、むねとすとおもへとなり。「不退」といふは佛にかならずなるべき身と、さだまるくらゐなり。これすな

はち正定聚のくらゐにいたるをむねとすと説きたまへるみのりなり。

いかにも懇ろな御釋であります。この偈の意味が明白にいたゞけます。即ち、阿彌陀佛の本願力によつてわれらは救はれるのである。その本願力の救ひとは、本願にちかはせられた南無阿彌陀佛の名號を信じて、淨土へまゐらせていたゞくことを要期にしてよろこぶものは、一人ものこらず淨土へまゐらせていたゞける。従つて、信ずるとき、この世にありながらほとけのおはからひによつて、ひとりでに、淨土に往生してそのまゝ佛に成るにまちがひのない不退轉の位、即ち正定聚にいたらしめたまふといふ立前であるとの意味であります。約言すれば、信ずる一念に、まちがひなしに淨土にうまれ佛果をさとする身分にならしていたゞけるといふことであります。

この四句の文を、むかしから破地獄の文といつて尊重するのであります。

昔、漢の玄通律師が、旅をしてある野のなかの寺に宿つたとき、となりの坊でこの偈文を誦へるのをきいたことがあつた。のち、律師が戒を破つたために地獄におちて閻魔王にさばかれるとき、ふと、この偈文を思出して誦へたところが、閻魔王は冠をかたむけて拜んだといふ傳説がつたへられてあるのであります。この傳説は趣ふかい鑑賞をしめすものであります。即ち、名號を信する力によつて迷ひを轉じて悟りをひらくことができるこの法悦をのべられたものであります。

おもふに、われらの佛になれるお浄土を建立なされたわけではなくて、そのお浄土へうまれる生命となつて阿彌陀佛はその全き聖徳をわれらにめぐみたまふのであります。こゝにおいて、萬人の救はれる道がひらけたのであります。お浄土の門扉は萬人のまへにひらかれてあります、たゞ閉されたのはわ

れらの眼だけであります。疑ひに掩はれて盲となつてゐるだけであります。そこで佛は信心の眼を與へて救ひたまふのであります。

聖なる立場

次に「菩薩至願を興して、己が國も異なることなからんと願ひ、普く一切を度せんと念はゞ、名あきらかに十方に達せん。」とたゞへられました。

これは菩薩が阿彌陀佛の浄土に往生すると、この浄土と異らぬやうに成就して、のこらず一切の衆生を濟度したいといふすぐれた願をおこして、ほまれある名聲を十方に博することができやうといふ意味であります。

こゝに彌陀と同體のさとりをひらくことができる浄土の徳をたゞへられたのであります。そして、利他の大悲を首として一切を救ふ尊い生活に參與す

るのであります。阿彌陀佛とおなじ悟りをひらき、阿彌陀佛とひとしい活動をなすことのできる聖なる立場があたへられるわけであります。

最高の聖化

終に「億の如來に奉事し、飛化して諸刹に徧く、恭敬し歡喜して去いて、還りて安養國に到らむ」とたへられました。

また、かの淨土に往詣すれば、あらゆる如來に仕へ、あらゆる世界に自由自在にすがたをあらはして、佛を恭敬していそくと法味を愛樂しては、淨土にかへることができるといふ偈頌であります。

最高の聖化生活は仰いで如來を供養し、俯して群生を救済することであり
ます。

お淨土に往生するとき、おのづから、この聖化が成就せられることをたへられたものであります。

(六) 難信の大法

若人無善本
 不得聞此經
 清淨有戒者
 乃獲聞正法
 曾更見世尊
 則能信此事
 謙敬聞奉行
 踊躍大歡喜

若し人、善本なければ
 此經を聞くことを得ず
 清淨に戒を有てる者
 乃ち正法を聞くことをう
 曾更世尊を見たてまつるもの
 則ち能く此事を信じ
 謙敬して聞きて奉行し
 踊躍して大いに歡喜せん

僣慢弊懈怠
 難以信此法
 宿世見諸佛
 樂聽如是教
 聲聞或菩薩
 莫能究聖心
 譬如從生盲
 欲行開導人
 如來智慧海
 深廣無涯底
 二乘非所測

僣慢と弊と懈怠とは
 以て此法を信じ難し
 宿世に諸佛を見たてまつるもの
 樂んで是の如きの教を聽かん
 聲聞あるひは菩薩にして
 能く聖心を究むるものなし
 譬へば生れてより盲たるもの
 行きて人を開導せんと欲ふが如し
 如來の智慧海は
 深廣にして涯底なし
 二乗の測るところに非ず

唯佛獨明了
假使一切人
具足皆得道
淨慧知本空
億劫思佛智
窮力極講說
盡壽猶不知
佛慧無邊際
如是致清淨
壽命甚難得
佛世亦難值

唯、佛のみ獨り明かに了りたまへり
假使一切の人
具足して皆道を得
淨慧もて本空を知り
億劫に佛智を思ひ
力を窮め講説を極めて
壽を盡すとも猶ほ
佛慧の邊際なきことを知らじ
是の如くして清淨に致りたまふ
壽命は甚だ得難く
佛の世亦値ひ難し

人有信慧難
人信慧有ること難し
若聞精進求
若し聞かば精進して求めよ

宿善の開發

これから已下は彌陀の本願はありがたい希有難信の法であることをほめた
へられる偈頌の一段であります。
まづ「若し人善本なければ、此經を聞くことを得ず、清淨に戒を有てるも
の、乃ち正法を聞くこと獲」とたへられました。
若し人にして前世に功德善根を積むといふ宿善がなかつたならば、いまこ
の世に生れてすぐれた大經の本願のおいはれを聞くことはかなはない。前世
に清淨な生活をして、戒律をたもつたものが漸くこの正法即ち本願の名號を

聞くことができるのであるといふ意味の偈頌であります。

五六

謙敬の領納

また「曾更世尊を見たてまつるもの、則ち能く此事を信じ、謙敬して聞き奉行し、踊躍して大に歡喜せん」とたゞへられました。

この一偈は曾て前世にて佛を拜んだものが、そのありがたい因縁によつてこの本願の救ひを信じ、身をへりくだり法を敬うて聞いて忘れず信じてそむかず、おどりあがるほどによろこぶことができるのであるといふ意味であります。

大法はめぐまれるのであります、謙敬に領納しなくてはなりません、そして大法を如實に信受し實踐するとき、身も心もすくはれてよろこべるのであります。

ります。かゝるありがたい信行も、決して偶然ではないので、前生に佛たちを拜んで、そのおそだてを蒙つたあらはれであることを感佩しなくてはなりません。

樂聽の宿緣

また「憍慢と弊と懈怠とは、以て此法を信じ難し、宿世に諸佛を見たてまつるもの、樂んでかくの如きの教を聽かん」とたゞへられました。

大法を領納するものは謙敬でなくてはなりません。自ら高くとまつてうぬぼれ他人に對してたかふる憍慢、道にすゝむことになまけがちな懈怠、かうしたにくむべき弊惡に荒んだものはかゝる聖い法をまうけにすることはむづかしいのであります。たゞ前世に諸佛を拜んだものが、その護持と養育のあ

五七

らはれで、このんでこの教法を聴聞することができるのであります。

持戒と見佛、かうした宿世の善根をつんだことによつて、こゝに聞信と奉行の宗教的機縁がひらけてきたのであるから、深いこゝろもちによつて信しなくてはなりません、そして、かゝる宿善のひらけてくるところにも、慈光の調熟を蒙つてゐるのであるから、ありがたく感佩しなくてはなりません。

佛智の深廣

次に「聲聞或は菩薩にして、能く聖心を窮むるものなし、譬へば生れてより盲たるもの、行きて人を開導せんと欲ふがごとし。如來の智慧海は、深廣にして涯底なし、二乗の測るところに非ず、唯佛のみ獨り明かに了りたまへり」とたゞへられました。

聖心即ち大聖如來の御心は聲聞や菩薩のやうな因位の修行者では窺ひ知ることができない。それは恰度、生れながらの盲人が人を手引しやうといふやうなことで全く不可能なことである。まことに如來の智慧は海のようであつて、廣くして涯なく、深くして底がない。聲聞や菩薩や二乗の因位にあるものはとうてい測り知るところでない。たゞ、佛のみが佛の智慧を明らかにさとりたまふのであるといふ偈頌でありまして、つまり佛智の深廣なること、絶對の智見であることを示して、佛智をめぐまれた宿縁深厚の行人でなくては、この本願の大法をさゝわけることができなことをさとされたものであります。

難思の佛智

また「假使一切の人、具足してみな道を得、淨慧もて本空を知り、億劫に佛智を思ひ、力を窮め講説を極めて、壽盡すとも、猶ほ佛慧の邊際なきことを知らじ、是の如くして清淨に致りたまふ」とたゞへられました。

これは、たとひ世界のあらゆる人々が、一人ものこらず道果をひらき、けがれない淨らかな智慧をもつて、法界の本來皆空である實相を知りぬくやうになつてながい／＼億劫のあひだかゝりづめに佛智を思ひはかり、力のあらんかぎり講説をこゝろみて、全生命をさしげつくしても邊際のない佛智を知ることができない。如來の智慧はかほどまで絶對にて無邊のものであり、清淨の證果をきわめつくされたものであるといふ意味であります。

これを要するに、この偈頌は絶對の佛智は不可思議の極致であることを示して、自力のはからひを以てはからふべからざることを懇示された次第であ

ります。

極難信の法

終りに難信の法をたゞへて「壽命は甚だ得難く、佛の世亦値ひ難し、人信慧あること難し、若し聞かば精進して求めよ。」とのべられて、すみやかに信受すべきことをすゝめられてあります。

人と生れてこゝに壽をたもつことはまことにありがたいことである。幸に人壽をうけても、佛の在世にめぐりあふことはあり難いことである。たまたま佛の在世に値うても、その法をきいて信心の智慧をいたゞくことはさらにあり難いことであります。

故に、若しひとたび教法を聞くことができるとならば、まごゝろこめて求

六二
めなくては取かへしがつかないことになるぞと、難信のいはれを示してすみ
やかに信受すべきことをお勧めなされたのであります。

(七) 勸信と激勵

聞法能不忘	法を聞いて能く忘れず
見敬得大慶	見て敬ひ得て大いに慶はば
則我善親友	則ち我が善き親友なり
是故當發意	この故に當に意を發すべし
設滿世界火	設世界に滿てらん火をも
必過要聞法	必ず過ぎて要めて法を聞かば
會當成佛道	會す當に佛道を成じ
廣濟生死流	廣く生死の流を濟はん

知遇の鴻恩

六

眞實の大法を信受することは、難きが中になほ難きことであります。わが聖人は御本典の總序に「遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり」と感佩せられ、「聞くところを慶び、獲るところを嘆ず」と慶嘆せられました。

極難信の法であるから、恭々しく信受いたさねばなりません。よつてこの偈頌には最後に、難信の諸相を述べて、すみやかに聞信すべきことを勸勵されてあります。

まづ、「法を聞いて能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶はば、則ち我が善き親友なり、この故に當に意を發すべし。」と述べられてあります。

御法を聞いて信じ、相續して忘れず、うや／＼しく大法をいたゞいてよろこぶ人々は、則ち私が善き親友であると、諸佛は親しみを以て是認せられる。かゝる佛に是認せらるゝ身となるほまれをおもふにつけて、まさに道意を發して道を修むべきであるといふ意味であります。これは信ずるものゝ現生のほまれをあげて信心を勧めたまふ次第であります。

わが聖人は、この諸佛の是認、釋迦の知遇を感激なされて、正像末和讃に

他力の信心うるひとを

うやまひおほきによるこべば

すなはちわが親友ぞと

教主世尊はほめたまふ

と、述べられてあります。かうした身にあまる光悦と利益を思ふにつけても、急いで道心を培ひ、信樂をいたゞかねばなりません。

大千の火を過ぎて

終りに「設世界に満てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、會ず當に佛道を成じ、廣く生死の流を濟はん。」と結ばれてあります。

たとひ大千世界に満ち／＼てをる火のなかをくゞつてなりとも、眞劍に御法をきく人は、きつと佛のさとりをひらき、廣くまよひの世界を濟度して、自力々他圓滿の妙果を成就することができるといふ勸勵であります。

親鸞聖人は讚阿彌陀偈和讚に、

たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

佛の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり

と讚嘆あらせられました。三千世界に燃えさかる火の中をかきわけても、求めなくてはならないものは、眞實の生命であります。しかるにこの眞實の生命が、聞きやすく、たもちやすき名號としてわれらに廻施せられるのであります。われらは直ちに信受いたさねばなりません。

後の言葉

六八

これは、昭和八年の夏、顯眞學苑の曉天講座に講述したものであります。而してその講述の大要を『道』に連載いたしてをきました。同人のすゝめによつてまとめたのが、この一巻であります。

いくらか整理をほどこし、また補足もいたしたいと考へましたが、あはただしい生活にとりまぎれて、その餘裕も見出せないために、そのまゝ編輯していただくしました。

このさゝやかな講述も、若し道友の法味を愛樂なさる手がかりとなりますれば、この上もないよろこびであります。

更に大原君の嘆佛偈講話、高千穂君の重誓偈講話と参照していただくことが出来ましたら、大經の三偈頌を講讀した三部曲として、意味づけられるかと存じます。

昭和十六年十二月十五日夜半

洛北の山茶花莊にて

梅原眞隆

六九

423
430

昭和十七年三月十日印刷
昭和十七年三月十五日發行

往觀傷講話
定價四拾錢
送料參錢

著者

梅原眞隆

發行者

京都市上京區小山西元町四一
顯眞學苑出版部代表
木下靖夫

印刷者

京都市下京區壬生川通五條下ル
同朋舍

不許複製

發行所

京都市上京區小山西元町四一

顯眞學苑出版部

會員番號第二〇九〇〇四號

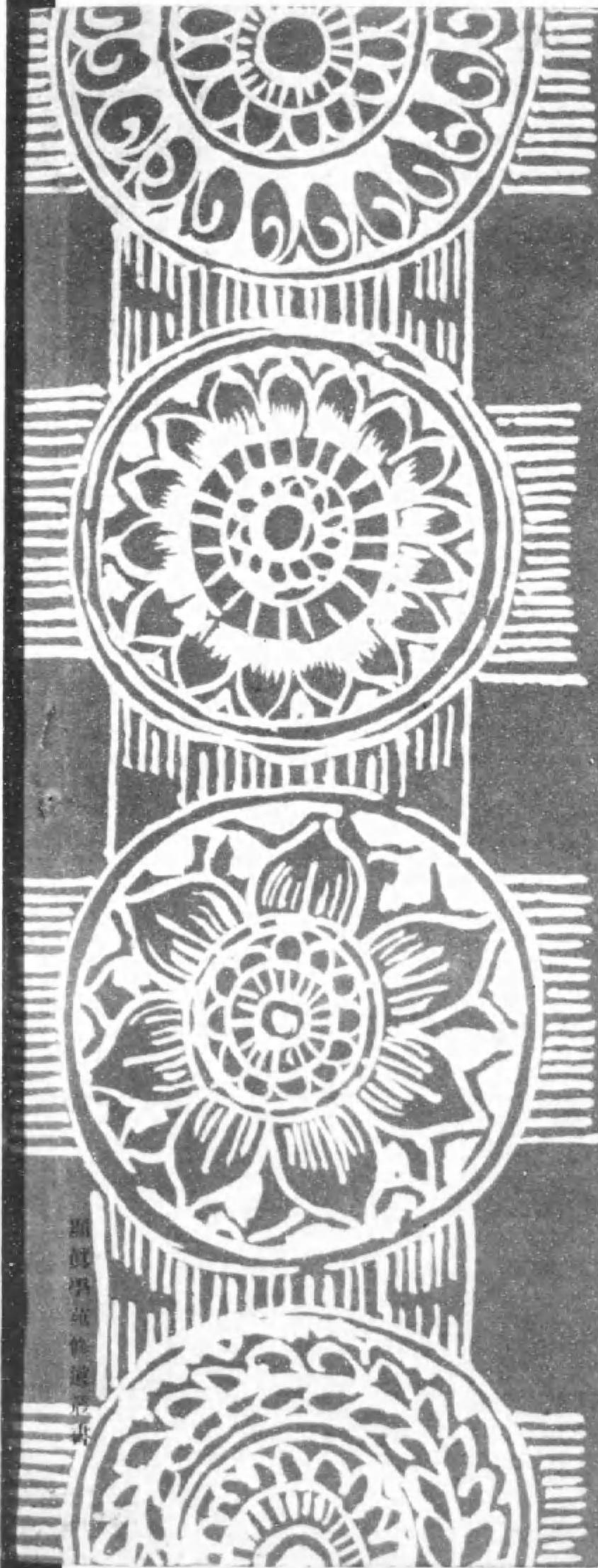
振替京都一四八七一番
電話西陣四六六八番

配給元

東京市神田區
淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

終



照此學法作畫